

四年目にはいる感想

三 木 卓

早いもので、非常勤の講師として文教大
学女子短期大学部へ通うようになってもう
三年が過ぎてしまった。じぶんが学生だっ
たころにくらべて、一年一年がなんてみじ
かいのだらうと思っている。

非常勤の講師になったのは二度目のこと
で、この前は昭和四十年代のなかごろの四
年間だった。かよったのは法政大学であ
る。いまこの学校に通っている学生諸君が
生まれたころのことだから、ぼくも若かつ
た。三十代のなかばということになる。ぼ
くはまだ、まっくろい髪の毛がふさふさ
に生えていたし、ぼくを知っている人なら
わかると思うがいわゆるベビーフェイス
(といったって善玉かどうかはわからない
けれど)だから、丸首のセーターなんか着
ていくととても教師にはみえない。掲示板

のまえにたっていたりすると、「よう、マ
ッチもっていねえか」なんて声を掛けられ
たこともあった。「わるいな。もってねえ
んだ」というと「がっかり」なんていつて
いってしまう。十メートルぐらい離れてから
その学生が、チラッとふりかえり、アレ
ッ、という顔をしたのがおもしろかった。
いま思い出しても胸がスーッとするの
は、学年末の試験のときに起こったことだ
った。学生の問題についての質問をうける
ために教室をぐるぐる回ったのだが、ある
教室に入っていくと、監督をしている助手
のひとか大学院の学生が、いきなり問題用
紙をぼくにつきつけてこういったのであ
る。

「なんだ今頃来て、しょうがないなあ。さ
あ、そこにすわってすわって。急いでやら

ないと間にあわないぞ」

このときは教室がこわれてしまいかと思
われるほどみんなが笑い、監督はあきれ
た、というがっかりした声で、「なんだ、
先生だったのかあ」といった。ぼくはいた
く満足したが、いま考えてみると精神的に
子供っぽいのが現れてしまっていた、とい
うことにすぎないかもしれない。

いずれにしても、ぼくはそんなに若かつ
た。もちろん授業なんてへたくそで、学生
諸君はいい迷惑だった。こっちが持つてい
るものはまあ、いっしょうけんめいやる
ということだけで、それもそうしなければ教
室を維持できないからだ。つまりおち
こぼれになりたくなかったというだけのこ
とだ。

そういう先生だったけれど、学生諸君は

見捨てないでよくつきあってくれたと思
う。一九七一年の一月にぼくはその年新設
された高見順賞という詩に与えられる賞を
受けたのだったが、新年の第一回の教室に
出ていくと、彼等は拍手で迎えてくれた。
そのころのぼくは、経済的にも元気がいい
とはいいかねる状態だったし、いったいお
れはどうなっちゃうんだいとおもっていた
ときだったから、この拍手はありがたくう
れしかった。

しかし、時代はなかなか大変で、世界的
にいつて学園紛争が起こっていて、法政大
学もそのまっただなかにあった。外でヘ
ルメットをかぶった学生諸君がマイクで絶
叫したり、校庭で火を燃やしたりしてい
て騒然としているなかで授業をするなどとい
うことは珍しいことではなかった。何はと
もあれ、若者たちが、お互い同士できずつ
けあい報復しあうというようなことになっ
ていつてしまったことはつらく悲しいこと
だった。先生方も大変で、けつして無傷で
はすまなかった。あのころのことを思い出
すと、心が暗くなる。ぼくは何もできな
かったから、みてみぬふりをしているよりな
かった。それだけに、当時の学生で、今は社

会人の連中から電車のなかなどで、元気な
声を掛けられたりすると、とてもうれしい。
ぼくは詩を書いたり小説を書いたりする
のが本業で、いわば現場の人間である。文
学者や文学について、評論的な文章を書く
こともあるけれど、それもそういう立場か
らのものにつまるところなってしまう。き
ちんと系統だった学識などあるわけがな
い。法政でのときも、今度の文教でのとき
も、ぼくがここで何ができるかということ
を考えないですますわけに行かなかった。

教師としての訓練も受けていないぼく
に、出来ることがたくさんあるとは思われ
ないが、あるとすればその現場の人間とい
うことを生かすということになるはずであ
る。文学者も文学作品も、できあがって評
価され歴史のなかに位置づけられるが、少
年のころのぼくには、そういう人や文学は
じぶんとはまったく関わりようのないすご
い世界のものであるように思われた。しか
しいうまでもなくそんなことがあるわけが
ないし、あつていいわけでもない。そのこ
ろのぼくと同じ年頃の学生諸君が、もしぼ
くのような気持ちで対象を感じていること
があるとすれば、多少現場にいることのあ

るものとして、正当な理解のために役に立
てないか、などと思つたのであるが、もち
ろんこれは荷が重すぎることである。しか
しせめて、現場というものはこんな匂いが
してんだな、こういうとらえた、わか
りかたをしりするんだな、というぐら
いのもがき方は出来ないものだろうか、と思
つてやっているのである。

あとは、こうして人生をやってきた、年
長の人間としてじぶんをさらすよりない。
その姿を参考にしてもらおうと思っただけ
である。

数日前、今年のぼくの最後の授業が終わ
った。ゼミナールの学生諸君は、明らかに
一年間の人間的な成長をみせて卒業してい
くことになる。ぼくは毎年をとるが、学
生諸君は取らないから、新学期は一つ年齢
が開くわけである。先生方が毎年感じるこ
の感慨を、ぼくも感じていた。バスに乗っ
て校門を入つてくるとき、白い姿のいい木
が見えてくるが、非常勤講師のぼくは、今
度やってくる四月のある日、その木をみて
今年はどこで何を教え何を学ぶことができ
るか、楽しく思いめぐらせるにちがいな
い。